

大学内ギャラリーで地域高齢者の自主制作作品を 展示することの意義についての覚書

*A Note on the Significance of Exhibiting Artworks
by Local Senior Citizens in a University Gallery*

松村 淳子 MATSUMURA Atsuko

(芸術教養領域)

1 はじめに

愛知県北名古屋市にある「北名古屋市回想法センター」(以下、センター)は2003年に設置された「地域回想法事業」拠点である。国のモデル事業としてスタートし、認知症予防や地域のコミュニティ拠点として活発な活動を展開しており、全国的にも回想法と地域ケアを融合した先駆的な試みを継続している。「回想法」とは、1960年代にアメリカで開発された心理療法の一つで、科学的にも認知症予防に効果があるとされている。昔使っていた生活用品や、写真などの思い出の品などをきっかけに、体験や思い出を語り合うことで、認知症の進行やうつ病などの予防に効果が期待できる。センターでは、昭和時代の日用品を収集公開している「北名古屋市歴史民俗資料館(昭和日常博物館)」と連携し、高齢者の幼少期や青年期などにあたる当時の実物資料を用いた回想法事業を展開したり、高齢者が博物館で資料の説明をするイベントを実施するなど、資料を回想法に活かすだけでなく、高齢者の社会活動の現場も創出している¹⁾。さらに、回想法を体験する「回想法スクール」が修了すると同時に、参加者は「いきいき隊」に任命され、自主活動グループに移行し、つながりを維持している。

筆者は、2003年にセンターがスタートした時から継続的に関わりを持ち、2020年に名古屋芸術大学に講師として着任したのを機に、2021年春より3回にわたり、「いきいき隊」による作品展を大学内ギャラリーで開催してきた。開催の目的は主に3つあり、1つは学生の自主的な活動の現場を用意すること、もう1つは高齢者の創作活動とおした異世代間交流の機会を創出すること、最後の1つは地域高齢者が社会と関わる場をつくることによる社会貢献である。そのうちに、60代後半から80代前後の高齢者の作品展をとおして、展覧会という社会に向けて発信をする場に自らをおくことが、高齢者の「生き生きとした生活」にどのような影響を及ぼすのか、また効果があるのか、ということに関心の軸が移っていった。

本論では、これまで開催してきた展覧会の概要と様子をまとめるとともに、簡易なアン

1) 北名古屋市歴史民俗資料館(昭和日常博物館)では、「博福連携」として、博物館×福祉の連携を積極的にすすめている。

ケート調査からみえてきたことをふまえ、とくに大学という学びの場所において高齢者が社会的に自らの創作活動を発表することの意義を検討することを試みる。

2 北名古屋市回想法センターと回想法

まずは、センターと回想法について概略をおさえておきたい。

2-1 北名古屋市回想法センター

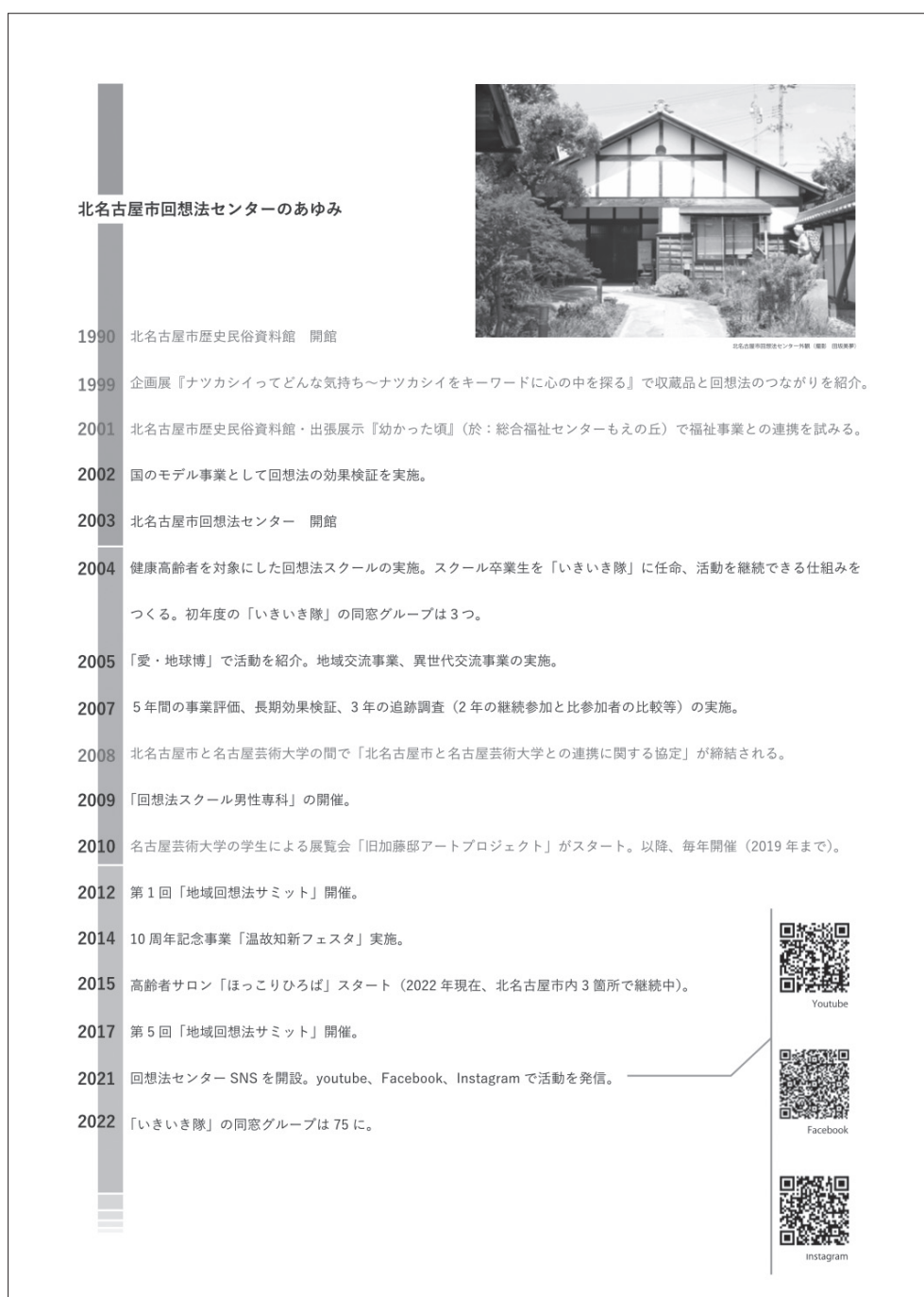
センターの設立について語る時、まずは北名古屋市歴史民俗資料館（昭和日常博物館、以下、博物館）の存在を把握しておかねばならない。博物館では、昭和20～30年代を中心に日々の暮らしで使用されていた日用品が収集、公開されている。レトルトカレーのパッケージや、樟腦の袋、牛乳瓶のフタ、学校の教科書など、当時の様子がありありと思い出されるような資料の数々が展示されている。博物館は1990年に北名古屋市図書館と同じ建物内に開館した。昭和時代の日用品を収集する全国的に見ても例がない博物館であり、1999年には『ナツカシイってどんな気持ち～ナツカシイをキーワードに心の中を探る』と題した企画展で回想法と収蔵資料の関係について紹介している。きっかけは、来場者の様子だったという²⁾。1993年に特別展『日常が博物館を出入りする時』で館全体を昭和30年代の資料で構成し、「昭和日常博物館」という呼称が設定された。博物館を訪れると必ず「懐かしい」「昔使っていた」「私の家にはちがうものがあつた」といった資料をみて当時を思い起こし懐かしむ来館者の声が聞こえる。はずむ声で一緒にきた家族や友人と話す姿から、この資料と来館者との関係をより活かした展開として回想法との連携が生まれた。

2002年に国のモデル事業として本格的に地域回想法事業への取り組みが進められ、国登録有形文化財「旧加藤家住宅」を活用した地域回想法が展開され、その敷地内に地域回想法拠点として「北名古屋市回想法センター」が2003年にオープンした。その後の流れは年表（画像1）に詳しい。

センターではさまざまな取り組みがされているが、中心となるのは「回想法スクール」である（画像2）。市内居住の概ね65歳以上の高齢者を対象に、全6回（開始当初は10回）のスクールが開講される。毎回、語り合うテーマを決め、スクールが進められていく。効果測定も行われ、体験前と後を比べると、ほぼすべての参加者に気鬱が抑えられ、活発になり前向きな姿勢になったという効果が認められる³⁾。スクール修了後には、参加者は「いきいき隊」に任命される。回想法事業の普及や、旧加藤家住宅の案内、異世代間交流イベ

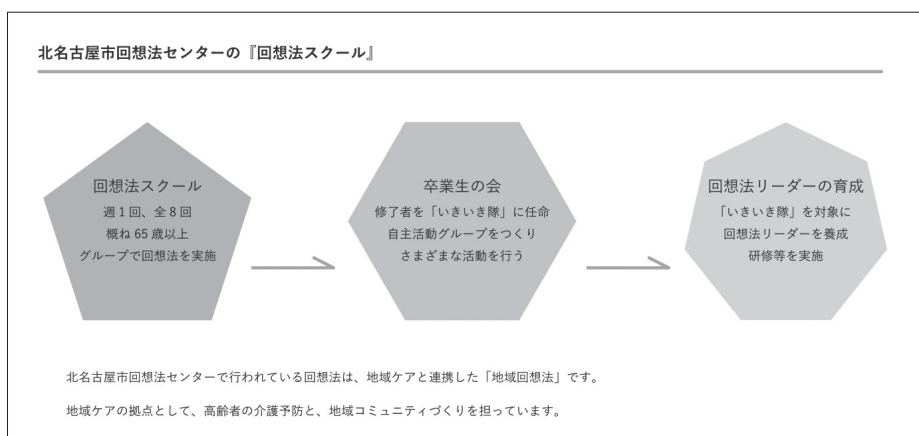
2) 参考：『北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要1 博物館資料の資源化——昭和日常博物館の可能性』2007年3月20日、北名古屋市歴史民俗資料館

3) 参考：北名古屋市公式webサイト、回想法ページ <https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000077.php>（2024/10/17閲覧）

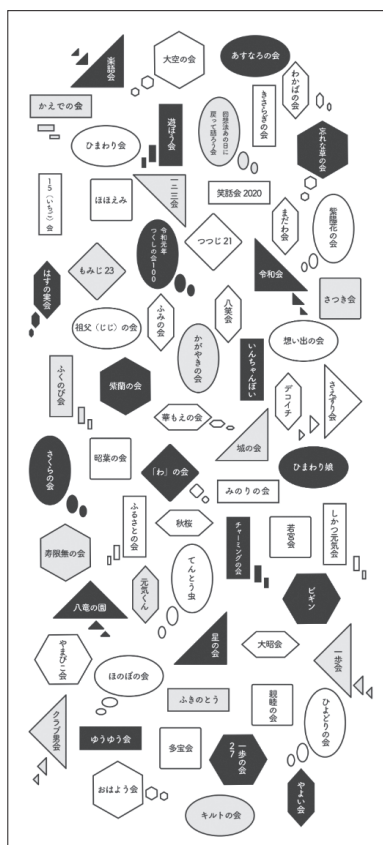


画像1 2022年『みんな「と」つくったもの。』のために作成した年表。

ントの実施、自主活動グループでの活動など、積極的な社会参加の機会を創出している。開始当初3つだった自主活動グループも現在は70を超え、回想法を継続して実施してい



画像2 回想法スクールの仕組み。2022年『みんな「と」つくったもの。』で展示したパネル部分。



画像3 自主活動グループ一覧。2021年『みんながつくったもの。』で展示。

るグループや、小物づくりや文集づくり、園芸や野菜づくりなど、さまざまな内容で定期的にセンター内外で集まって活動が行われている（画像3）。

2-2 回想法

1960年代にアメリカで開発された心理療法である「回想法」は、過去のことを思い返す回想から呼び覚まされた記憶や思いを聞き取り、他者と共有していく過程をとおして、脳を活性化させるとともに、社会的な快活さも獲得する手法である（画像4）。日本においては特に1990年代に病院や介護施設などを中心に広がっていった。実施方法はいくつかあるが、センターでは「グループ回想法」の手法を取り入れた回想法を行っている。複数人で一つのテーマについて回想を行い、語り合い、傾聴し合う方法である。参加者は10名前後で、リーダーとコリーダーが1名ずつ加わり、場を進行する。リーダーとコリーダーは傾聴に徹することが基本で、全体をまとめたり会話を促したりする役目を担当する。円形に座り、お互いの顔が見える状態で、一人ずつテーマから回想したことを話していく。下記のようないくつかのルールを事前に確認し、不快な思いをする人が出ないように配慮しながら進められていく。特に、「この場限り」で他者に内容を漏らさないという確認がとれていることで、個人的な回想の内容も話しやすくなり、またそうした内容を共有することで仲間意識も芽生えていく。



画像4 回想法のイメージ。2022年『みんな「と」つくったもの。』で展示したパネル部分。

〔回想法の主なルール〕

- 発言を否定したり、非難したりしない。
- 無理に話を聞き出さない。
- 沈黙も受け入れる（語り始めるのに時間を要する場合や、沈黙にも意味がある）。
- 語った内容は「この場限り」とし、承諾なしに第三者に話さない。
- 語る内容が曖昧だったり、うまく伝えられない場合もあるが、それを指摘せずに、一緒に思い出をたどる。
- 回想法を促す「アイテム」を用意する（実物資料、写真、映像など）。

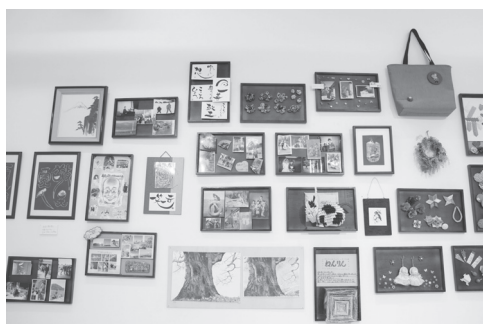
回想法は、科学的にみたときに脳の血流が増加し認知機能の衰えを防ぐ効果があることだけでなく、心理的な活性化を促す点に大きな特徴があるといえる。非薬物治療として効果を発揮することで、場所や時間、お金などに左右されることなく誰しもの取り入れることが可能な点も注目される。

タイトル	『同時開催 2023年度後期「プロジェクト2」授業制作展・北名古屋市回想法センター作品展 みんなとできたこと／みんながつくったもの vol.3』	 同時開催 2023年度「プロジェクト2」授業成果展・北名古屋市回想法センター作品展 北名古屋市回想法センター作品展 2024年 4月19日〔金〕～4月24日〔水〕 12:15～18:00 / 日曜休み 名古屋芸術大学 東キャンパス Art&Design Center East 北名古屋市中区之江2-1 281 室地 / 0568-24-0315 (代表) 主催：名古屋芸術大学 芸術学部 芸術教育領域 協力：北名古屋市回想法センター 回想法スクール卒業生の会「いきいき隊」のみなさん 2023年度「プロジェクト2」授業成果と、授業内で連携をした北名古屋市回想法センター「いきいき隊」による作品展も同時開催します。『異世代間交流』『創作活動』2つの視点にも着目します。
会期	2024年 4月19日(金)～4月24日(水)	
展示内容	・個人で制作された作品 ・2023年度後期「プロジェクト2」授業成果	

3-1 2021年『みんながつくったもの。』

初回の展覧会ということで、センターや「いきいき隊」について紹介することに主軸を置いて企画構成した展覧会。事前にセンターに出向き、「いきいき隊」の面々に懐かしい写真や自分で制作した小ぶりの作品を持ち寄ってもらい、木枠のなかに自由にレイアウトした作品を制作した（画像5）。制作時には学生スタッフを伴い、一緒に作業をすることで異世代間交流を促す機会も創出した。また、書道グループに対しては、手元をクローズアップして筆を動かしている様子を事前に撮影し、映像作品としてプロジェクターで会場に投影した（画像6）。このように大学内ギャラリーで展覧会を実施することはセンターにとっても初の試みであり、準備中にはセンター職員や「いきいき隊」からの積極的な要望もよせられた。風やレース、グループで制作した作業台、苗木などもとの展示プランでは想定していなかったものの展示は、そうした要望から実現した（画像7）。また、「お土産を渡したい」という希望から、会場内に「いきいき隊」が制作した折り紙も設置され、来場した学生たちが遊ぶ様子がみられた（画像8）。

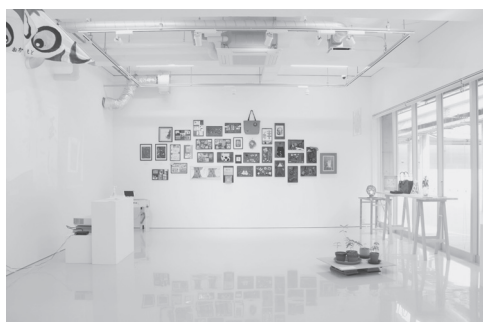
初めての開催ということもあり、多くの地域高齢者が来場した。自分の作品を友人に紹介しながら会場内を歩く様子や、居合わせた学生から説明を受ける場面などがみられ、普段のギャラリー展示に比べても学外からの来場者率が高かったことがみてとれた。自分の作品を紹介している様子からは、木枠に入れた経緯や、そのときの学生らとのやりとり、木枠に収めたものについての詳細などを賑やかに語る姿がみられ、活発な社会的やりとりを確認することができた（画像9）。



画像5 展示の様子。木枠のなかに写真や制作物をレイアウトしたものや、木枠に入れずに展示したものもある。



画像6 書道の様子を撮影し、壁面に投影。手前には水書道のセットを置き、来場者も疑似体験できるようにした。



画像7 展覧会全体の様子。



画像8 お土産



画像9 自分の作品をお互いに紹介し合う様子。

3-2 2022年『みんな「と」つくったもの。』

学生の自主企画として「いきいき隊」を対象としたワークショップを事前に行い、その成果物の展示を中心に据えて開催した。ワークショップは、2022年3月28日(月) ①10:00～11:30、②13:00～14:30、センターを会場に各回5名定員で実施した。午前が女性、午後が男性というグループで構成された。「変身！ラクガキ写真」と題し、その場で参加者のポートレートを撮影し、印刷したものに落書きをしていくというものである。参加者



画像10 「変身!ラクガキ写真」で制作された成果物。



画像11 立体的な作品も目立った。

は学生スタッフと一対一になり、①では「春の思い出、春といえば?」、②では「人生で一番キラキラしていたのは?」をそれぞれテーマとし、回想されたエピソードを語り、それを受けて学生はエピソードにあわせたアイテムを写真に描き足していく。語ったことが可視化され、より鮮やかに回想されたことが浮かび上がった(画像10)。特に重要視されたのは参加者と学生の交流で、世代を超えた回想法の取り組みに一つの可能性を提示できたのではないだろうか。

個人作品の展示は、1回目に対してフォーマットを設定せずに自由に並べる方法を選択し、「いきいき隊」にギャラリーまで出向いてもらい、学生と一緒に配置などを検討して展示することを試みた。「いきいき隊」は並べ方にあまり頓着がみられなかったが、学生はこれまでの学びや若い感性を生かして、よりよく見えるレイアウトを考えて提案し、実際に並べていた。そのやりとりを通して、「いきいき隊」は学生から肯定的に自身の作品が受け入れられたことが実感されたのではないだろうか。学生は、「いきいき隊」による作品のクオリティの高さや楽しんで制作している様子に刺激を受けたようにみえた。また、木枠というフォーマットをなくしたことで、立体物やサイズの大きな作品も展示され、よりバリエーション豊かな展示内容となった(画像11)。

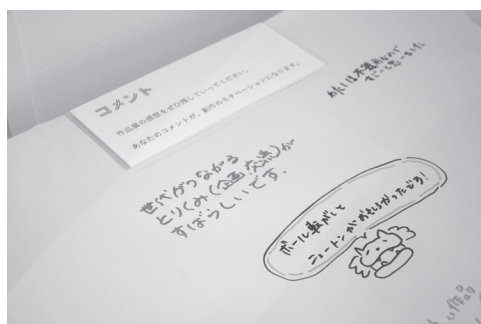
そのほかには、有志学生による回想法をイメージしたポスターの展示を行い、若者世代から捉えた回想法の新しいイメージを地域高齢者へ伝える機会となった。

3-3 2024年『みんながつくったもの vol. 3』

3回目となった本展では、より広いエリアを用意して作品展示を行った。今回はスケジュールの関係上、事前に作品をお預かりし、教員と学生のみで展示を行った。2回目で展示作品のバリエーションが広がったが、今回も平面から立体までさまざまなバリエーションの作品が並んだ。また、一人で複数の作品を出展する人も増え、一人当たりの展示数が平均して5つ前後とこれまでにない量になった。多いと一人で10点前後出す人もあり、創作に対する熱量が最も伝わる展示になったと思われる(画像12)。また、新たな試



画像12 展示の様子



画像13 コメントを寄せるコーナー

みとして来場者にコメントを残してもらうコーナーを用意した（画像13）。学生を中心に、大学職員や地域高齢者などによる書き込みがみられ、自分の作品をみにきた「いきいき隊」の面々はそうしたコメントを目にし、純粋に嬉しかったという声を聞くことができた。

一方で、間をあかずに3回開催してきたことで、出展する作品の数やバリエーションは増えたものの、とくに2回目と3回目では大きな作品の差異はみられず、一見するとあまり変化のない内容になっていた。また、出展をしている「いきいき隊」についても、初回から比べると関わり方が希薄になっていたこともあって、「一緒に展示をする」という空気が薄れていることが大きな反省点であった。大学内ギャラリーで実施するからこそ、もっと積極的な学生との交流機会の創出や、「いきいき隊」とのコミュニケーション機会の増加などに力をいれるべきだっただろう。

ただ、逆を言えば、大学内ギャラリーで展示をするということが恒例となってきた片鱗もみられ、毎年の行事の一つとして定着していく可能性を感じることができた点は成果と言えるだろう。

4 アンケート調査

2024年『みんながつくったもの vol. 3』に参加した「いきいき隊」にアンケート調査を

実施し、展覧会に参加したことの意義や地域ケア、地域貢献の効果検証を試みた。

アンケートは下記の項目で紙媒体で実施した。センター職員に参加者への配布と回収を依頼し、2024年5月15日(火)～6月28日(金)の期間で実施した。展覧会へは22名（内グループで参加が2）の参加があり、アンケートには20名から回答があった。

〔アンケート項目〕

問1. 年代をおしえてください。(該当するものに丸をつけてください)

40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代 ・ 80代 ・ 90代

問2. 性別をおしえてください。(該当するものに丸をつけてください)

男性 ・ 女性 ・ 回答したくない

問3. いつから「いきいき隊」に参加していますか？

_____年から ※はっきりした年代が不明な場合はおおよそで構いません。

問4. 名古屋芸術大学で行われる作品展に参加するのは何回目ですか？(該当するものに丸をつけてください)

はじめて ・ 2回目 ・ 3回目

問5. 今回の展覧会に参加した理由を教えてください。(該当するものに丸をつけてください。複数回答可。)

興味があったから ・ 楽しそうだったから ・ 勧められたから

知人、友人が参加するから ・ 自分の作品をみてほしかったから

その他（自由記述）

問6. 展覧会に参加した感想を教えてください。(自由記述)

問7. 名古屋芸術大学で行われる作品展以外に、作品を展示したことはありますか？(該当するものに丸をつけてください)

ある ・ ない ※「ない」と回答した方は問10へ。

問8. 問7で「ある」と回答した方にお聞きします。それはどのような展覧会でしたか？(自由記述)

問9. 問7で「ある」と回答した方にお聞きします。名古屋芸術大学で行われた作品展とは、どのような違いがあると感じましたか？(違いを感じなかった場合も、その理由とあわせてご回答ください)（自由記述）

問10. 作品を制作することは、自分にとってどんな意味を持っていると思いますか？(自由記述)

問11. 作品を展示することは、自分にとってどんな意味を持っていると思いますか？(自由記述)

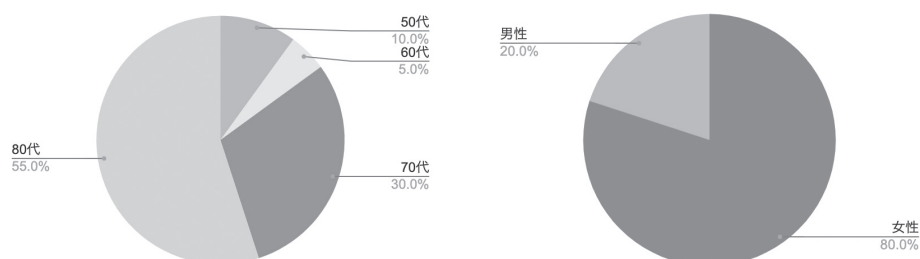
問12. 機会があればまた名古屋芸術大学で展示をしたいと思いますか？(該当するものに丸をつけてください)

思う ・ 思わない ・ わからない

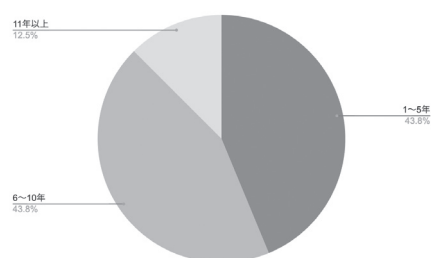
問13. 今回の作品展に関して気づいたことや要望等があれば教えてください。(自由記述)

アンケートの回答結果は次の通りである。

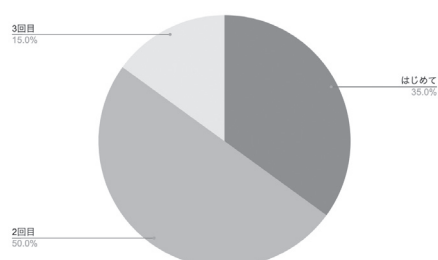
〔問1、2〕 年代と性別



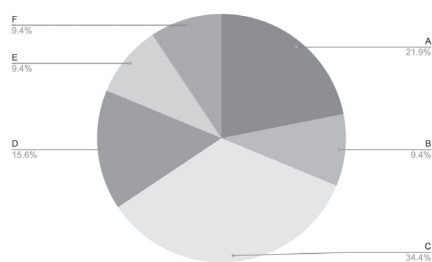
〔問3〕 「いきいき隊」の参加年数



〔問4〕 学内ギャラリー展示への参加回数



〔問5〕 展覧会に参加した理由



A) 興味があったから (21.9%)

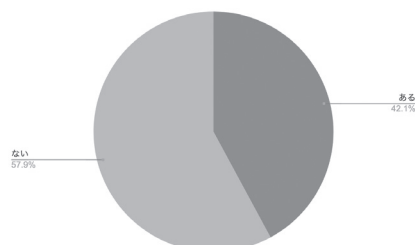
B) 楽しそうだったから (9.4%)

- C) 勧められたから (34.4%)
- D) 知人、友人が参加するから (15.6%)
- E) 自分の作品をみてほしかったから (9.4%)
- F) その他 (9.4%)
- 「大空の会」として文集を出展したが、評価を知りたかったから。
- ものづくりは楽しく好きだが、強制や義務から参加したくはない。
- 前回の展覧会が楽しかったから。

[問 6] 展覧会に参加した感想

- 自分たちが出品したのは「文集」だったので、手に取る人は限られたかもしれないが、手に取ってくれた人にはきっと貴重な経験になったと思う。
- ものづくりの楽しさを通じて「異世代間交流」の社会的価値が高まったら良いと思ったから。
- 作る楽しさと、人の作品もみて楽しむことができた。
- 今年は作品も多く良かったと思う。車で行く人と一緒にいけたので助かった。
- 意外と多くの人が出展していると思った。他の作品の思いに啓発された。
- 手作り作品がたくさん展示されていて参考になった。
- 他の作品をみて製作者の人間性がよくわかった。
- 次の作品はどんなものに、制作意欲が湧いてきた。
- 自分の作品は展覧会で見劣りしていなかった。
- 参加したことは満足している。
- 手作り感があり良かった。
- 作者、作品の様子は元気の証。
- 作品を大変楽しませていただいた。
- 特別な感じがしてよかった。
- いろいろ皆さんの作品を見せていただくということは勉強になる。
- 今までみにいだけだった展覧会に自分の作品が並んでいて恥ずかしかったけど少し嬉しかった。
- 他の人の作品をみて自分もまたやってみようと思ふになった。

[問 7] 学内ギャラリー以外での展示経験



〔問8〕 問7で「ある」と回答した人のみ、展覧会の概要

- 画廊の一室を3人で利用し、それぞれの作品を展示した。
- 北名古屋市文化祭で手芸クラブとして展示。
- 回想法センターの小規模な作品展。
- 陶芸の作品展。
- 北名古屋市文化祭や名古屋市の中学校の文化祭など。
- 北名古屋市の各々のクラブの作品展で。旧文化勤労会館で11月の文化祭に展示と販売で参加。
- さくら荘で活動しているクラブの作品展での展示。年2回出展に参加。
- 近代水墨画総合展（愛知芸術文化センター）、水墨画教室作品展。
- カルチャーセンターの展示（水彩）、地元の郵便局（絵手紙）。

〔問9〕 問7で「ある」と回答した人のみ、学内ギャラリーでの展示との違いについて

- 市の文化クラブとして多種多様（生花、書道、絵画、陶芸、手芸等）でした。
- 来場者の反応が直に伝わってきて次の作品への創作意欲が湧いたこと。
- なかなかうまくできなくても参加できればいいかと。見てくれた方の感想はわからないが。
- 違いはないと思う。それぞれ真剣に取り組まれているし、制作することは一緒だと思う。できた時の達成感の喜びも一緒。
- 個々のアイディア作品がおもしろかった。

〔問10〕 作品制作の自分にとっての意味

- たった一人の経験から生まれた作品だとしても、子どもや制作をあまりしない大人にとっては、それぞれの生き方に何かしら影響を与えようと思うので、それが制作の喜びにつながっている。
- 作るものにより配色太さ等考えたり両手を使うので脳にも刺激を与え、また、体が不自由になり外出できなくなったとき一人でも楽しめることを学んでおいて良かったと思っている。
- 自己表現と自分の創造的な満足、作品を通して他者とのコミュニケーションをとるきっかけになるもの。
- 自分が健康で楽しくやれるから。
- 認知症予防、みんなでつくるから楽しい。
- 趣味を生かしていけるので楽しく、また、脳トレにもなると思う。
- 製作中に別のアイディアが湧いてくるのがよくあります。制作することは、自分の中にある潜在的知恵を引き出せることです。
- 手仕事の楽しみ。
- 自分の心や個性、人間性を形にすることのように思える。
- 自分の才能表現。
- 自分を豊かにするもの。
- 少しは頑張る力になっているかなと思う。
- 作る楽しさ。
- 洋裁が好きだから。常になおしものにひぐらし、幸せ。
- 自分にできることを楽しみとしていた。
- 今の気持ちを写すもの？
- 自分の健康とこどもに迷惑をかけず自立した生活と一日一日を楽しく過ごしたいという気持ち。

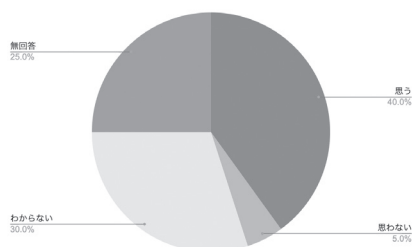
何かに取り組んでいると元気でいられるのかなって思う。

- 今回ワークショップで作ったものを展示したが、何か習い事をしている自分の中で上達したものを披露したらもっと達成感があると思った。制作することとは好きなことが上達できる機会だと思う。
- 観察力を常に持ち、作品の達成感、行動力、また、部屋を明るくする。
- 使わなくなったもの（思い出の洋服、その他）、新しい生地、それらを組み合わせて何ができるか、アイデアを考える時がすごく楽しいしうれしい。新しく蘇ったものも、またどなたかが使ってくださいと嬉しい。繋がりやの輪ができるといい。
- 作品を作るうえで試行錯誤したり、工夫したりしている過程が楽しく、仕上がったら次への意欲につながる。
- 好きなことを学びながら認知症予防のため。

[問11] 作品展示の自分にとっての意味

- 作品を完成させることで達成感がある。プロセスも充実感をもたらすと思う。
- 人に見てもらふことで次にも頑張る意欲が湧く。
- 作品の展示によりつくらはげみになる。
- 知らない方から「大学の作品展に出展されていましたね、みましたよ」と声をかけてもらった。展示をすることは自分にとって作品を通して未知の人と知り合えることでもある。
- 自分の才能や人間性を知ってもらふ。
- 自分を評価してもらふ。
- 他の作品から学んだり、新しい自分を発見する。
- 心を豊かにする。
- 展示をする機会があると少しは頑張れるかなと思う。
- 特にない。
- 気持ちが若いと思う。
- 楽しく作ったことを知ってもらえる機会。
- やはり展示するという目標があれば、頑張れるのかなあと思う。それが刺激になっていると思う。
- 展示されると達成感が得られると思う。
- 自分の作品との違い。

[問12] 学内ギャラリーでの展示にまた参加したいか



〔問13〕 学内ギャラリーでの展示について気づいたことや要望等

- それぞれの制作のスキルが毎回向上しているように感じた。
- 皆さんの感想等書くコーナーがあり良い発想だと思った。
- 来場者の反応がわからない。学生？一般？来場者数？作品への感想は？来場者が感想を自由に書き込めるスペースを用意してはどうか？次回も参加しようと思えるようなフィードバックを望む。
- 今後も続けて欲しい。
- 高齢者の作品に対し忌憚のない意見、評価をいただき、若い方たちと交流をはかりたい。
- 作品から面白さを感じた。
- 「いきいき隊」が多趣味なのがなぜか、わかった気がする。お話も楽しいが自分の中に没入して作品をつくり展示でみんなに見てもらえることも楽しい。

アンケート結果からは、次のようなことが明らかになった。女性の参加が男性に対して圧倒的に多く、女性は全体の8割であった。裁縫でものづくりをする自主活動グループが参加していたことで、女性の参加率があがったと考えられる。年齢では、80代が全体の半数以上、70代とあわせると80%を超え、後期高齢者の部類に入る年代の人たちの参加が多かったことがわかる。2名50代の回答者がいるが、これはセンター職員の2名であり、今回は作品展示に参加していた。「いきいき隊」としての活動年数は10年以下が87.6%にのぼり、11年以上の人は4名であった。最初期から「いきいき隊」として活動している人は、活動年数が20年を超えるが、概ね65歳以上の人に参加していることを考えると、10年以上の人の参加が少ないのは当然のこととも言える。しかし、そのなかでも80代の参加が多かったことを考えると、70代に入ってから回想法スクールへの参加や「いきいき隊」への参加をしている人が多いことがみえてくる。

展覧会への参加は、2回目の人が最も多く50%、次いで初めてが35%、3回目が15%だった。参加の理由に「前回が楽しかったから」と回答している人もいて、学生が実施したワークショップがあったことなども影響して、続けて参加してくれた人が多かったと考えられる。また、初回は事前に一緒に展示する作品を制作するプロセスを踏んでいたが、そこに参加できる人は限られたため、自ずと参加者数も2回目、3回目と比べると少なかったことが考えられる。参加理由としては、「勧められたから」が34.4%と最も多く、次いで「興味があったから」がおよそ21.9%、「知人、友人が参加するから」が15.6%、「楽しそうだったから」と「自分の作品をみてほしかったから」、「その他」がそれぞれ9.4%であった。作品制作の意義をみると、自己表現に楽しみを見出している人が目立ったが、それをふまえると「自分の作品をみてほしかったから」参加するという人の割合が低く、意外とも言える。複数回答が可能な設問であったが、「興味があったから」と他の回答を選択している人が多く、最後の一押しとして、知人や友人の参加や勧めがあったことが伺える。展覧会の感想としては、他者の作品を見て感嘆したり刺激を受けたりといっ

た反応が目立ち、自分の作品の出来栄えに満足している様子もみられた。

学内ギャラリー以外での展示経験がある人は全体のおよそ40%で、北名古屋市が主催するカルチャークラブなどでの作品展が目立ち、いわゆる「ギャラリー」での展示経験がある人は2名だった。大学内ギャラリーとの違いに言及している人は少なかったが、回答されたものをみると、質問の意図がうまく伝わっていなかった可能性がある。しかし、「違いはない」とはっきりと示した回答もあった。自分にとっての作品制作の意義に、認知症予防や脳トレ、他者との交流や、自身の思いの発露、純粋な喜びをあげる人が目立ち、心身の健康を保つことにつながっているという自覚や、つなげようとする意思が感じられた。作品を展示する意義についても、質問の意図が明確に伝わっていないと見受けられる回答が散見されたが、次の創作意欲を刺激する、創作活動への励みになると回答している人が目立ち、他者とのコミュニケーションの機会を挙げている人もいた。学内ギャラリーへの次回以降の展示については、参加したいと思う人が40%、思わない人が5%、わからないと回答した人が30%だった。3回目の展示に対しての感想や要望としては、継続して欲しいというものもあったが、世代を越えた交流を期待する声もみられ、大学内で行う展覧会としての特性をもっと発揮することが望まれていることがわかる。

5 まとめ

2021年、2022年、2024年と展覧会を開催してきた。初回の2021年は、「いきいき隊」や回想法について紹介することに主軸をおき、展示する作品についても事前に「いきいき隊」と一緒に制作したり、こちらから展示形態を提案し、映像の撮影などを行い、コミュニケーションを積極的にとった結果が展覧会にあらわれていた。2回目の2022年は、学生企画のワークショップ成果をメインの展示としたことで、「いきいき隊」の自主制作作品の展示スペースは少なくなったが、初回の時のようなフォーマットを廃したことで、立体物が増えるなど作品自体のバリエーションを広げることができた。3回目となった2024年は、アンケートからも「今後につながるようなフィードバックを期待する」「若者との交流をはかりたい」という要望がみられたように、「いきいき隊」とのコミュニケーション不足がみられたものの、作品点数はこれまでで最も多く、作品のバリエーションも豊富だった。一方で、類似した作品を出展する人もあり、一見すると同じような展覧会を継続しているようにも見えることに課題が見出された。

アンケート結果からは、展覧会自体は好意的に受け取られているものの、作品を展示することについて意識的な人はあまり見られなかった。作品制作の意義の回答数に比べて、作品展示の意義の回答数は明らかに少なく、展示することで意欲が湧くという人や、励みになるという人はいるものの、制作することと展示することが必ずしもセットではなく、むしろ制作を継続できることが重要で、展示して誰かに見てもらうことはさほど重要視されていないともみてとれる。しかし、他の人から感想を伝えられて嬉しくなったり、やる

気を出したりといった経験がある人もいて、展示することの喜びや達成感などは確かに感じているようである。

展示をすることで他者から反応を得られ、自らの創作意欲が励まされ、創作活動が継続される、というサイクルは大学内ギャラリーでの展示ではなくとも、別の場所でも生じることである。アンケートでも「違いはない」と述べる参加者がいたように、文化会館の一室やカルチャーセンターの一室でも、センターを会場にした場合でも、鑑賞する人がいれば起こりうることである。では、大学内ギャラリーで展示を行う意義はどこにあるのだろうか。これも、アンケートで言及されていた「異世代間交流の社会的価値を高めること」や「若者との交流をはかる」というところから見出されるだろう。芸術大学であるからこそ、期待される面もあるだろう。「高齢者の作品へ忌憚ない評価を」と回答した人がいるように、世代は違えど、同じ創作者として交流をはかることへの期待や、そのことへの可能性が示されている。

ギャラリーが空いている時期として四月の前半に展覧会を開催してきたが、そうすることによる企画者と「いきいき隊」とのスケジュール調整の煩雑さや、学生参加のハードルがあがることなどがあり（春休み期間中で帰省する学生などが多いことや授業期間外であることが影響）、開催時期は再検討が必要であろう。そして、3回目の展覧会での反省とアンケート結果をふまえ、「大学内ギャラリーで実施するからこそ」の展覧会になるように、今一度大学内ギャラリーの特性を丁寧に検証する必要があることがわかった。もう一つ、回想法スクールを体験してきた高齢者を対象にしていることや、異世代間交流を検討する点からも、今一度回想法をテーマに据えた企画の練り直しも必要だと思われる。

大学内での作品展示が地域高齢者の「生き生きとした生活」にどのように貢献したのかをはかることを目指していたが、どのような状態が「生き生きとした生活」にあたるのか、先行研究の読み込みが間に合わず、本論に入れることができなかった。また、効果測定を行うためのアンケートであったが、設問意図を正しく受け取られなかった回答が散見され、正しく測定をするためには設問の見直しと、対面での聞き取りにするなど調査方法を変更する必要があるだろう。研究としては不足している部分が多いが、まずは実施してきた展覧会の概要と、参加した地域高齢者の考えや思いなどを知ることができた点で、ひとまず「覚書」としてまとめることはできた。これを出発点に、今後さらなる研究を進めていきたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり、展覧会に全面的にご協力くださり、アンケート調査へも尽力くださった北名古屋市回想法センター職員の水野佳江様、坪井裕子様両名に深く感謝申し上げます。また、展覧会への出展、アンケート調査へご協力くださった北名古屋市回想法センター「いきいき隊」のみなさまにも深く感謝申し上げます。

参考文献

『北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 1 博物館資料の資源化——昭和日常博物館の可能性』2007年3月20日、北名古屋市歴史民俗資料館

北名古屋市公式webサイト、回想法ページ <https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000077.php>
(2024/10/17閲覧)

北名古屋市公式webサイト、回想法のページ「北名古屋市の回想法」<https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000071.php> (2024/10/17閲覧)